

死と、死の受容

1、死は人生で、最大・最後の難問です。なぜなら、人は必ず死ぬのに、誰一人死者として死を語れないからです。死は誰にも平等に、不意に訪れる不確実な存在です。多くの日本人は死への不安を感じつつ、死を避けて忘れようとしています。しかし、迫り来る死の足音は私達から決して離れる事はありません。

日本人は、戦後の平和に慣れ親しみ、医療技術の急激な進歩に気を取られ、いつの間にか死をタブー視し、死を人生の遠い存在に追いやり、いつまでも死なないという死生観を定着させしまいました。死を忘れた死生観が、一時の怒りや憎しみでいともた易く、他人の命を奪ってしまうような凶悪事件や無差別殺人事件を引き起こしているのかも知れません。命の有限性の自覚がなければ、命の尊さは決して実感できないでしょう。最近では、がんや余命の告知も日常的に行われるようになりましたが、私達は生まれた時から既に、死に向かっている存在です。ですから、常日頃から自分で納得できる死生観を固めておく必要があります。その意味でも「死と、死の受容」について考えて見ましょう。

2、1950年代頃の日本では、大多数の人は自宅で死を迎えるのが普通でした。その後、医療の進歩に伴い、病院で死を迎える事が一般的になりました。一か月程前、「病院で死ねない！？…医療費抑制の波紋（5月29日・NHKクローズアップ現代）」が放映されました。今後、高齢者の急激な増加に伴い、病院で死ねない方々が増え、在宅で死を迎えざるを得ない状況になるのではとの内容でした。また最近、孤立死や孤独死が相次いで発見され、新たな社会問題が明らかになりました。私達はこのような状況下で、自分・家族・他者の死について、死をタブー視せず、逃げず、隠れず、正面から立ち向かう必要が生じております。日本人は、死の受容（受け入れ）が苦手な国民と言われております。西欧諸国の様な一神教の国々では、神は依然として人々の心の拠り所になっており、多くの方々が神と永遠の生命を信じておられます。ところが、最近の日本人の大方は、神や来世を信じておられない様です。がんや余命の突然の告知に、宗教的支えが乏しい多くの日本人は精神的パニックに陥りがちです。私達は前もって宗教に依存しない何等かの死の受容の方法を、見つけ出しておく必要があろうかと思えます。

3、死とは…死という得体の知れない不気味な存在は、それから目を背け避けている限り、不気味さは解明されません。死の扉を開け、死を見つめ、とことん考え抜けば、死は恐れる存在ではありません。医学上の死…1970年代に人口呼吸器が普及してから、従来の死（心臓の停止・呼吸の停止・瞳孔の拡大→死の判定）に加え、脳死が新しく登場しました。哲学上の死…死は哲学の誕生以来の永遠のテーマです。哲学者が、死をどの様に捉えたかを考えます。宗教上の死…宗教（神）の始まりは、死の不安の解消が出発点の一つと考えられます。医学・哲学・宗教の三方面から「死」を考えて見ましょう。

死の受容…自分の死は、私達にとって最大の苦悩です。死の不安の原因は、死に際の苦しみ、自己の消滅、死後が不明な点等にあります。また、家族の死は深い悲しみを伴います。自分・家族・他者の死の受容は、各人の死生観により千差万別です。大別して2つに分けられます。一方は、何か（靈魂とか魂）が残る場合で、その場合信仰による場合と、何となく信じている場合に分けられます。他方は、何も残らない場合です。本日は、自分の死の不安が解消可能な「死の受容」について考えて見ましょう。

◆2012年度 東京大学大学院人文社会系研究科 臨床死生学・倫理研究会

7月4日（水）、「死と、死の受容」 講師：死生学研究会代表 内田 誠